

マダム貝聞録

No.8 フィジーの産業事情 藤井由佳(協同総合研究所)



フィジーは、国民1人あたりのGDPが2,308.6米ドルという経済力を持ち、南太平洋諸国の中ではリーダー的存在です。主な産業としては、インド系首相チョードリーが政権時代に支援政策をとったこともあり、砂糖生産が好調に増加しました。もう一つの柱は観光産業で、観光訪問客が毎年増加傾向にあり、かなり好調です。衣料品の生産、輸出等も著しく成長し、農業もコブラ、タロイモ、野菜等の生産が好調でした。そのほか、フィジーは南太平洋におけるアジア、アメリカとオセアニア地域を結ぶ国際航空路の重要地点として多くの国際便が就航しています。ナンディ国際空港は、年間およそ80万人に利用されています。また、船舶の太平洋航路上の主要地点でもあり、いくつかの重要な港があります。

今回は、フィジーの産業について紹介します。

フィジーの産業事情

島嶼国の貿易

フィジーは島嶼国である。島嶼という地理条件から生じる問題点は様々だが、島嶼経済問題を分析した議論にMIRAB経済論というものがある。MIRABとは、移民社会(MI)、送金収入(R)、経済援助(A)、官僚組織の肥大化と民間セクターの欠如(B)を意味している。島嶼民には移民が多く、彼らによる送金や海外援助を主な対外収入として得ており、その結果、政府部門が拡大するという島嶼経済の現状を示す言葉である。

そのような島嶼国のフィジーでは、2002年の貿易輸出額総額が578.6百万米ドルであった。外貨を獲得するために輸出が果たす役割は非常に大きい。1975年、ヨーロツ

パ連合(EU)は、アフリカ、カリブ海、太平洋地域71カ国と援助に関する協定を締結した。トーゴのロメで結ばれたことから、ロメ協定と呼ばれている。援助のメニューは、欧州開発基金による二国間プログラム、欧州投資銀行の融資プログラム、農産物輸出収入の変動に対する補償制度、鉱産物に対する特別資金援助、緊急援助、無関税による製造品のEUへの輸出、特定産品に対する輸入保証枠制度等がある。この制度的枠組みを活用して、フィジーで生産される砂糖の約60%がEU向けに輸出されている。砂糖以外にも、このロメ協定によってマグロ、生姜加工品、衣料製品等に対してEUという輸出先が確保されている。

さらに、1981年、南太平洋地域貿易経済

協力協定(South Pacific Regional Trade and Economic Cooperation Agreement/SPARTECA: スパーテカ)が発効された。これは、オーストラリアとニュージーランドが、島嶼国から数量規制なく、関税免除で輸出品を受け入れる制度である。そのおかげでフィジーは、衣料製品、農産物(砂糖を除く、タロイモ、野菜、果物など)の輸出が可能になった。以前フィジー経済は、製糖業、観光業に依存する構造をもっていたが、スパーテカにより衣料製造業という新たな産業を創生することに成功した。

砂糖産業

フィジーでは、全農地の50%近くがさとうきび畑となっていて、労働者の約5分の1が砂糖産業に従事している。フィジーの総輸出額の約40%、GDPの約11%を占めている砂糖と糖みつを合わせた総輸出額は、フィジー経済において重要な外貨獲得源である。また、日本におけるフィジーからの粗糖の輸入量は、オーストラリア、タイ、南アフリカについて第4位で、日本にとってフィジーは重要な輸入先国になっている。

さとうきびは、面積の大きいビチレブ島とバヌアレブ島で生産されているが、かんがい等の整備が進んでいないことから、生産量は気象条件によって大きく左右される。



収穫したさとうきびを工場へ運ぶ列車

産糖量、輸出量もさとうきびの生産量の変動に伴い、不安定である。さとうきび農家は約2万2000戸であり、作付面積25ha程度の規模が中心となっている。その多くがインド人で、土着のフィジー人から土地を借りて農業を行っている。

1996～2001年は平均で国内産糖量の90%以上にあたる約34万トンの粗糖を輸出した。また、国内産糖量の80%以上がEUと米国に向けて特惠価格で輸出され、それ以外では主に日本、韓国、マレーシア等のアジア諸国に輸出されている。

しかし、この砂糖産業にも暗雲がたちこめている。フィジーからEUへ輸出される砂糖の価格と販路は、ロメ協定の砂糖議定書で2006年までは保証されているが、WTO協定でEUは、数年間に砂糖価格を引き下げなければならない。EU砂糖制度改定のための論議も2003年に開始される。また、EUが「武器以外の関税の全面撤廃」を導入すると、2009年6月以降、後発開発途上国からEUへの砂糖の輸出は関税0%になる。その結果、アフリカ、カリブ海、太平洋諸国に対する特惠割当は削減され、フィジーの割当も減少するとみられる。

さらに、国内では借地問題が浮上している。フィジーのさとうきび農家はインド人が多く、土着のフィジー人から土地を借りているが、土地の契約更新期を迎えて借地権の放棄を求められている。そのため、農家は土地への投資を減らしており、さとうきびの品質および砂糖回収率が低下する要因の一つとなっている。

衣料産業

衣料産業についても見通しは明るくない。フィジーがオーストラリアとアメリカとの間

に締結した貿易協定の期限切れが迫っており、それによる混乱が恐れられている。この産業には6000人以上の雇用者がいるが、2005年の貿易協定の終了にともない、彼らはその職を失う可能性がある。アメリカは、フィジーとの二国間協定の交渉に関心が無いという立場をとっていて、WTOの規則に従い現在の数量割り当て制度を廃止しようとしている。フィジーにとって最大の衣料品輸出国であるオーストラリアは、衣料品輸入の割合を7.5～17.5%分削減することも予想されている。

観光産業

長年にわたりフィジー経済を支えてきた砂糖産業も衣料産業も、解決すべき問題が山積みとなっており、多額の累積赤字を抱え、出口の見えない深刻な状況に陥っている。ガラセ首相自らが政治生命を賭けて砂糖産業再生に乗り出しているが、2004年9月より開始された大洋州諸国とEUとの経済パートナーシップ協定フェーズII交渉では、

フィジーが現在享受している砂糖貿易での優遇措置を維持することは困難とされている。

そのような情勢の中で、観光産業への期待は非常に大きい。2000年5月のクーデター事件がフィジーの観光産業に与えた影響は甚大であったが、2001年の総選挙後、政情が安定化するに従い徐々に国際社会の信頼を回復し、経済活動も落ち着きを取り戻しはじめた。その後の観光産業の回復は著しく、2000年29万人だった観光客数が2002年は約40万人に増えた。2003年は、南太平洋競技会の開催の影響もあって更に観光客数が増加し、観光産業がフィジーの経済発展の牽引となるとみられている。また、ホテル等の多くの大型建築プロジェクトも着工しており、建築業界も好調である。

現在、ガラセ政権は、「ルック・ノース政策」を打ち出し、日本を含む東アジア諸国との関係強化を目指している。これまでフィジーは、オーストラリアやニュージーランドとの連携ばかりに力を注いできたが、北

フィジーの経済

主要産業	観光、砂糖、衣料が三大産業
GDP	19億米ドル(02年、世銀)
1人あたりGDP	2,308.6米ドル(02年、世銀)
GDP実質成長率	4.1%(02年、世銀)
物価上昇率	4.0%(03年)
失業率	14.2%(01年フィジー統計局)
貿易総額 (02年フィジー準備銀行)	【輸出】578.6百万米ドル 【輸入】946.0百万米ドル
主要貿易品目 (02年)	【輸出】衣類、砂糖、金、魚類、木材チップ 【輸入】機械・輸送機器、工業製品、食料品、雑貨品、鉱物燃料、化学品
貿易相手国 (03年)	【輸出】1.豪 2.米 3.英 4.日本 5.NZ 【輸入】1.豪 2.NZ 3.米 4.シンガポール 5.日本
通貨	フィジー・ドル(F\$)
為替レート	フィジー・ドル = 0.5814米ドル(03年平均 / IMF)
主要援助国 (百万米ドル、02年)	第1位:日本(18.7) 第2位:豪州(8.6) 第3位:NZ(2.8)

外務省ホームページより

には日本がいるではないか、もっと視野を広げて新たな関係をつくろうという政策である。表からもわかるように、フィジーにおける主要援助国の第1位は日本。2002年には成田空港からフィジーのナンディ空港への直行便も週2便が3便へ増便された。さらに、2003年5月、太平洋・島サミットでガ

ラセ首相が来日し、小泉首相と衛星通信による会談を行った。フィジーと日本の関係はこれからますます強まっていくだろう。

参考資料：やしの実大学ホームページ、独立行政法人農畜産業振興機構海外レポート、外務省ホームページ

番外編：フィジーへ行く

私が住んでいた学校は、フィジー本島で一番海がきれいなコーラル・コーストと呼ばれる海岸沿いの小高い丘の上にあります。眼下には、珊瑚礁の海に囲まれたヤヌザ島という小さな島を一望することができ、そこには、シャングリラズ・フィジアン・リゾートというホテルが建っていました。東京ドーム9個分もの敷地に、9ホールのゴルフコース、6つのレストラン、5つのバー、3つのプールがあり、ホテルから一步も出ずに子供から大人まで、盛りだくさんのアクティビティを楽しむことができる大規模リゾートホテルです。そしてヤヌザ島の所有権を持っていたのは、私の学校の理事長、すなわち村の酋長でした。

ヤヌザ島は、本島とは接していない正真正銘の自然の島です。炭素年代測定法によると、西暦1200年頃には人が住んでいたようですが、リゾート建設の話があるまではココナッツとマンゴーの木だらけのただの島でした。そのヤヌザ島に目をつけたのは、外国人商人。1865年、当時の酋長によって取引されましたが、鉄砲13本、弾100個、30個の火薬皿と数本の斧との物々交換でした。その後、1880年代後半にイギリス人の手に渡り、彼の死後、1904年に酋長に返還されました。現在はヤヌザ島の土地借用権をホテル経営会社が買い取っている状態です。そのおかげで、村人は、ホテル経営会社から定期的に借用料を受け取り、さらに、ホテルという大きな職場を得ることができています。

もし、フィジーへ行く機会があるならば、滞在先はもちろん「シャングリラズ・フィジアン・リゾート」をお勧めします。施設の充実度も、従業員の良さもフィジーで一番。なぜなら、私が数学を教えた生徒がたくさん働いているからです。レストランでウェイトレスをしていたり、フィジーの伝統芸能メケを見せてくれたり、ウクレレを弾いてくれたり、ダイビ



シャングリラズ・フィジアン・リゾート



フィジーの伝統芸能メケ・ダンス

ングのインストラクターだったり。彼らの父親や母親もいます。弟や妹も日曜日に教会で賛美歌を歌っています。

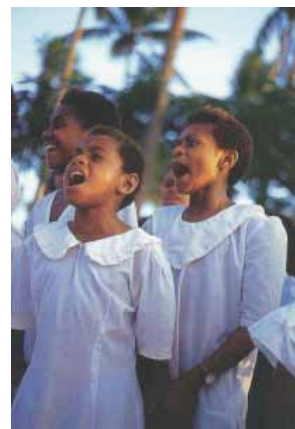
彼らは宿題をする時間も遊ぶ時間も惜しんで働いています、と言えば聞こえが良いけれども、実は、純粹にその仕事を楽しんでいるようです。リゾートから帰ってきたときは必ず、どんな観光客と会ったか私に話をしてくれます。「マダム、今日は日本人がいたよ。一緒に写真撮ったよ。Konnichiwa (こんにちは) ってあいさつしたよ。」と本当に楽しそうです。

彼らは心の底から、客人をもてなすことが大好きです。人と会って話して、歌って、踊って、笑って、相手に楽しい時間を提供することが大得意。明るくてとてもフレンドリーなフィジーの人々にぴったりなのは、観光業で国を盛り上げること。現在も大型リゾートホテルの建設が次々に行われています。どのホテルも日本人観光客を獲得しようと、あらゆる企画を打ち出しています。例えばフィジアン・リゾートでは、日本人の風呂好きに目をつけて、人工の温泉を開発しました。教会も新しくなりました。ハネムーン用にロマンティックなコテージもあります。

リゾート開発は、一方では環境破壊にもつながります。フィジーを訪れる観光客が一番楽しみにしているのは、きれいな海です。フィジーの美しい自然を守るのは、もちろんフィジー人ではあるけれど、日本に住んでいる私たちも、環境に配慮して生活しなくてははいけません。でも、やはり、フィジーのために何かと考えるならば、フィジーに行ってフィジーを好きになってほしいと思います。そして、フィジーの観光産業を盛り上げていただきたい。

フィジーには、「フィジータイム」という言葉があります。フィジー人は時間の感覚が非常にのんびりしていて、彼らと一緒にいると物事が時間通りに進まないのが普通。このことを、フィジー人自らもフィジータイムと呼んでいます。

E vica na kaloko? (エビザ ナ カロコ?) とは、「今何時?」という意味のフィジー語です。kalokoは英語のclockがフィジー風になまったものです。ということは、英語が使われ始めるまで、フィジーでは時間を表す言葉がなかったということ。「時間」というものは外国からもたらされたものなのです。時間の概念がもともとなかったフィジーへ、一度足を運んでみたくなりましたか。



子どもたちの賛美歌

Seqa ni leqa. (セガ ニ レンガ)

No problem.

フィジーで一番よく聞く言葉。何があっても、気にする必要は全くないのです。